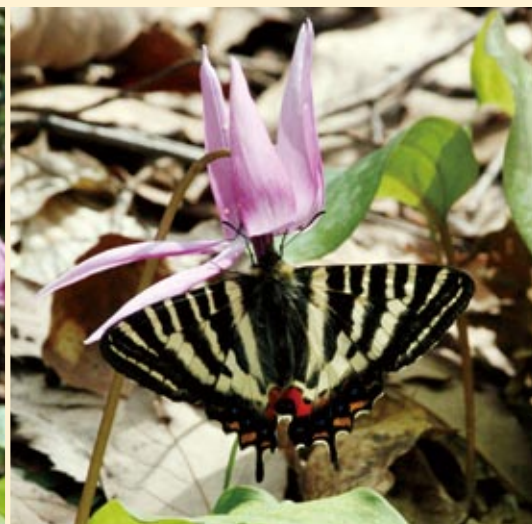




福井市自然史博物館

博物館だより

FUKUI CITY MUSEUM OF NATURAL HISTORY NEWSLETTER



左：カタクリの群生 右上：カタクリの蜜を吸うギフチョウ 右下：白色の花のカタクリ 足羽山にて吉澤康暢撮影

福井の自然史情報

足羽山のカタクリ

雪解け間もない早春、やわらかな日光の差し込む足羽山の林床では、たくさんの「春植物(スプリング・エフェメラル)」が可憐な花を咲かせます。足羽山の春植物といえばカタクリ。カタクリの群生地を歩いていると、ときに白色の花のカタクリや吸蜜をするギフチョウ(福井市指定天然記念物)に出会うこともあります。春の足羽山散策は、魅力と発見がいっぱいですよ。



中面に散策路「ブナの道」についての解説があります。

還暦記念プレ展

—六十年のあゆみと、
とっときコレクション大公開—

《開催期間》2012年3月17日(土)～5月13日(日)

1952年（昭和27年）7月20日に博物館としてスタートした当館は、今年、人でいうところの還暦を迎えます。設立時の資料やその後の60年間の活動記録を写真やパネルで紹介します。そして、数ある収蔵品の中から、オヤッ、これは何だろう？これは珍しい！これはなつかしい、といった、とっておきの標本を選んで展示・解説します。設立当時に採集された標本や、ふだん目にする機会の少ない珍しい標本が、あなたの知的好奇心をくすぐります。

60年前の展示作業を物語る 陳列計画案ノート

昭和26年4月、当時の福井市長・熊谷太郎氏の発案により、当館が福井復興博覧会の第二会場の主要施設として創設されるといふ計画が正式にスタートしました。基本構想は、市長と、当時の光陽中学校校長だった堀芳孝氏によって作られました。そして、翌年の4月10日より開幕する博覧会にあわせ、わずか1年の準備期間で、展示の基本計画・基本設計・実施計画、そして実際の標本収集と展示作業が進められました。当時の手書きの「陳列計画案」には、展示ケース内における標本の陳列位置や解説パネルの位置が具体的に示されています。できあがった常設展示と比べてみてください。



手書きの
陳列計画案ノートの一部



「陳列計画案」に基づいてでき上がった展示ケース

だいいりせき めいばん 大理石でできた初代の銘板

当館の創立時の名称は「福井市立郷土博物館」でした。「福井の一博物館は、郷土福井の範囲に限定して、それに徹することが、この博物館を価値あるものにする唯一の道である」との信念により、熊谷市長が「郷土」という言葉にこだわったと推測されます。その理念に基づき、当館はこの60年間、福井県内の動物・植物・鉱物などの資料を収集してきました。今回の特別展では、当時の博物館玄関にはめ込まれていた初代の銘板を41年ぶりに展示します。



「福井市立郷土博物館」の銘板

※現在の名称からは郷土という言葉が除かれていますが、これはもともと地域性の意味合いの強い「自然史」のうに「福井市」が冠せられることで、郷土の意味は十分含まれるという判断によります。

1951年に採集された オナモミの標本

わずか1年の準備期間にもかかわらず、県内の教職員の手弁当による協力で、約1400種の植物標本を収集し同定することができました。それらの植物の中には、当時はそれほど珍しくなかったのに、60年後の今となつては、ほとんど見かけなくなったものも少なくありません。例えば、オナモミやコオニタビラコは、そのような植物です。それらは当時の自然を語る“証人”と言えます。じっくり観察してください。



日本海側で採集された ムラサキイガイとしては 現存最古の標本

ムラサキイガイは地中海とその周辺を原産とするイガイ科の二枚貝ですが、昭和30年代に帰化生物として侵入し、現在では日本全国

にその分布域は広がっています。当館には高度経済成長期（昭和40年代）以前のムラサキイガイの標本が保管されており、それらの標本より、ムラサキイガイの侵入時期や経路に関する従来の議論を検証することができました。このような検証を可能にしたのは、博物館が標本の収集と保管という活動を担っているからです。論より証拠、半世紀前に収集された実物標本をぜひご覧ください。



福井県小浜で採集された
ムラサキイガイ

洪水で被災した サーカス団のライオン

昭和34年（1959年）8月、台風による豪雨により、足羽川が氾濫しました。当時河原で興行していたサーカス団の小屋が流失し、ライオンとトラが犠牲になりました。なんと、当館には、このライオンのものと思われる骨格の一部と歯が保管されていました。保管されていた箱には“足羽河原営業のサーカス獣（虎？獅子？）台風時の被災獣骨格”と記されており、また博物館の沿革史には「昭和34年、8月、桜橋流れる、ライオン、トラ、各1、館裏にうめる」という記述が残されていることから、ほぼまちがいないと推測されます。このライオンの歯は、半世紀も前に福井を見舞った自然災害を示す実物資料と言えます。



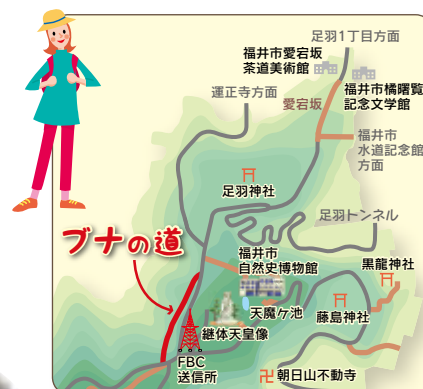
ライオンの歯（左上）と骨

足羽山「ブナの道」散策マップ



早春には、キクサキイチゲやカタクリなどの春植物※のお花畑を見ることができ、自然の美しさと生命力を感じることができるでしょう。

※早春から初夏にかけてのわずかな期間だけ地表に現れる植物を春植物（スプリング・エフェメラル）といいます。



～「ブナの道」位置図～



シャガの花(春)



アイノコフユイチゴの果実
(秋)



コブシの花(春)



ショウジョウバカマの花
(春～夏)



キクザキイチゲの花(春)



キクバオウレンの花(春)



チゴユリの花(春)



トキワイカリソウの花(春)



ヒメアオキの雄花(春)



ソヨゴの果実(秋)



カタクリの花(春)



2008. 3. 14

Illust by Yoshizawa

創立60年目の春を迎えて

吉澤康暢（福井市自然史博物館館長）

私の博物館との出会いは、小学校1年生（昭和27年4月）のときに足羽山で開催された福井復興博覧会の第二会場です。印象に残っているのは、県内の四季を現した1階のジオラマです。東尋坊の海底のようす、奥越の残雪期のツキノワグマ、晩秋の若狭路のイノシシの剥製などが並びリアルな生態展示でした。この展示手法は当時国内では初の試みで、高く評価されていたようです。

次の博物館訪問は、高校3年生のときです。宇宙に限りない興味を抱いており、博物館屋上にある天文台の望遠鏡を使わせてほしいと申し込みにいったのです。当時は高校生でも夜間の天文台使用が可能だったのです。これがきっかけで博物館との縁が深まり、大学生になってから小中高生の天文クラブの指導を任されました。

大学を卒業し教職に就くと同時に、博物館の地学領域の嘱託（現在の協力員）の辞令をいただき、博物館活動に本格的に参加するようになりました。当時の博物館の職員は館長含め4～5人体制で、学芸員は一人もいない状態でした。専門的な分野の自然史講座の担当、生物名の問い合わせ、特別展の準備などは、中学校や高等学校の理科の教員が博物館の嘱託として任命され、博物館活動を全面的に支えていたのです。

当館は昭和27（1952）年7月20日に福井市立郷土博物館としてスタートしました。今年は開館60年目にあたります。福井市は昭和20年7月に空襲、昭和23年6月には福井大震災とたび重なる災害に見舞われました。当時の福井市長であった熊谷太郎氏は、沈みがちな市民に心をいやしてもらおうと、市街地のどこからでも見える足羽山に、四季折々の花が見られる植物園をつくる構想を持ったのです。その後、努力の甲斐あって福井市は復興を果たし、内外に宣言する目的で福井復興博覧会の開催が企画されました。



昭和32年10月4日、秩父宮妃殿下御来福。妃殿下が博物館屋上に福井市街を展望される。熊谷太郎氏（右端）がご説明役。



創立当時の1階ジオラマ常設展示「早春の奥越」。



昭和32年1月27日に福井市久喜津町狐橋の河原で死体で拾得されたトキの剥製。（当館所蔵）



昭和43年頃の歴代館長（前列）と各分野の博物館嘱託。筆者は後列左から3人目。



屋上天文台内に設置されていた大型屈折赤道儀式天体望遠鏡の初代機（対物レンズは直径15cmのアカロマート）。

た。熊谷氏の構想は、足羽山を博覧会の第二会場とし、その主要施設として動物、植物、昆虫、岩石、化石、鉱物などを所蔵し展示する郷土博物館をつくる構想に発展したのです。当時の市民は日常生活が目

いっぱい、多くの予算を使う文化施設をつくる提案は反対も多かったようです。しかし、熊谷氏は多くの標本を所蔵し郷土の貴重な自然を紹介する博物館を造ることは、未来を担う青少年たちにとって大きな存在価値があると信じ計画を進めたのです。そして、博物館屋上は県下一の展望所となりました。福井市街をはじめ、平野の全貌、雪をいただく白山連峰などが望めます。熊谷氏の先見の明に感心します。氏は晩年「若き日のわが夢ひとつ実を結び、かの山に立つ白き建物」という歌を残しています。

創立時、福井県初の博物館としてオープンするために、ほぼ1年間という短期間で、県内各地より各種標本が学校の先生方や生徒の皆さんにより精力的に集められました。これらの標本類は採集時の記録と共に大切に保管されています。当館が所蔵している標本数は現在約12万点です。これらの標本類は全て郷土の貴重な宝物です。標本から当時の福井の自然環境を知ると同時に、現在の自然をひも解くことができるのです。博物館は、自然のタイムカプセルと言えます。今後、生物標本の遺伝子レベルの解析や安定同位体比の測定などの研究が行われる際には、貴重なデータ源を提供できる施設になると思われます。

創立60年目の春を迎えるにあたり、当館の成り立ちの歴史を見つめ直し、さらなる充実と飛躍を目指して努力する所存です。市民の皆様のご協力ご支援をお願いいたします。

《あとがき》

今年の7月20日に還暦を迎える当館は、60年という長い歳月の間、郷土の博物館として多くの先生方や市民の皆様を支えられてきました。この節目の年にあたり、3月17日から開催中の春の特別展では、当館の60年間の活動記録をもとに、そのあゆみを振り返ると共に、歴史を実感させるとっておきの標本を数多く展示しています。

続いて夏の特別展では、貴重な収蔵標本を一堂に展示し、実物資料が語る60年間の自然の移り変わりをぜひご覧いただきたいと思っています。私も学芸員として博物館の還暦に立ち会えることができること、福井の自然を改めて見つめなおす機会に恵まれたことに、とても感謝しています。（中村）

《交通案内》

【電車】

●福井鉄道福武線 公園口駅 徒歩20分

【バス】

●京福バス：清水グリーンライン（74系統）足羽山公園下バス停（あじさいの道登り）、不動山口バス停（藤島神社登り）各徒歩10分
●コミュニティバスすまいる：西ルート（足羽・照手方面）愛宕坂バス停 徒歩10分

【徒歩】JR福井駅から徒歩30分

《ご利用案内》

開館時間 ●午前9時～午後5時15分（入館は午後4時45分まで）
休館日 ●月曜日（祝休日は開館）、国民の祝休日の翌日、年末年始

入館料 ●高校生以上100円（20名以上の団体は半額）
中学生以下、70歳以上、障害者および付添の方は無料

